

関わりのなかで、気づいたこと～現役相談員の声～（抜粋）

1 年目から 10 年までの方

- 初めの頃はただ聴くだけで「こんなことを言ってはいけないのでは」、と思言えなかったことが、最近少しずつ伝えられるようになってきました。自分の質問や言葉によってより話が深まり、距離がぐっと縮まり、共感が深まることを感じています。
- 応答技術の研修で「その人の話は歌である。伸びやかに歌ってもらえるような伴奏者になることが、私たちの役割」と教えていただきました。一回一回の電話の繋がりを大切に、誠実に関わり学んでいきたいと思います。
- 様々な研修のおかげで、自分を見直したり、新しい気づきがあったりと、本当に助けられています。その中で私は、語ることによって自分の考えをまとめたり、気持ちに気づいたりできることを実感しました。だからこそ、電話をかけてこられる方々にも、自分を正直に語っていただける場を提供できるような相談員でありたいと願っています。
- 自分の周囲に見えている生活が、すべてのように思っていたが、今まで全く知らなかった生活があることを知り、いかに自分本位な見方をしていたかを知りました。様々な考えを受け止める努力をしていきたいです。生きるとはどういう事なのだろうと考えるようになりました。
- 自ら学び、自ら耳を傾けて聴き、自ら人の心に関心を寄せる。これほど自立心を意識してことにあたったことがあっただろうか。自分が経験したことのない相談者の過酷な人生を、どう受け止めたらよいか怯んでしまう。それでも、学んだことを実践して取り組もうとする自立心を持った自分でいたいと思う。

10年から20年までの方

- いのちの電話に関わって、いちばんの幸せは、自分自身を知る機会を得たことです。知ることで自分の課題が見えてきました。ここ数年は「沈黙に耐えられない自分」と向き合い、もがいています。
- 「お父さんお母さん、友達、周りに相談する人いないの？」
電話は切られてしまった。いじめに悩む生徒からの電話だった。追い詰められ、聞いてもらえる人も見つからず、やっと繋がった電話からも「周りに誰かいないの？」と言われてたら…。何とかしてあげたい、と気持ちが前のめりになっていた。話しやすい雰囲気の中で信頼関係が築かれ、ようやく話が始まるというのに。研修で学んだはずだが、患者は経験からしか学べないのである。活動を通じて、自分を見つめなおす作業をしているように思えます。自分をおろそかに受け入れる。私にとって京都いのちの電話はよりよく生きるための修業の場と言えるかもしれません。
- 他者と出会い、関わることで、「人とは」ということを深く考えさせられました。それは自分自身の人間観が問われることでもあり、生き方が問われることでもあります。だからこそ、これからもずっと電話の前に座り続けていきたいと思っています。
- 「ひとごと」の事が、相談電話を受けた途端に「ひとごと」でなくなり、あたかも自分の身内の悩みのように真剣に耳を傾ける、そういうことが出来る「いのちの電話」の相談員は本当に素晴らしいと感じています。また、相談員を支える組織や研修体制がしっかりしているからこそ、安心して電話相談ができると思います。
- 研修中は「感性って何？」の連続でした。ある方から戴いた「心はあたたかく頭はクールに、言葉は優しく中身は厳しく」を心に刻んで感性を豊かにしてゆきたいと思っています。

相談員歴 20 年以上の方

- 「一週間のうち 3 時間を必要としている人に使っていただけませんか」。募集面接でのひと言が始まりでした。たった 3 時間でよいのなら私にもできるかも…。それからは「聴く」ことの難しさにぶつかり続け、指導を受けながら、もう少し、もう少し、とここまできました。
- 相談者の言葉にひそんだ気持ちを読み、間合いや息遣いも聞き漏らさず、真剣勝負で受話器を握っています。相談者の苦しさ辛さに私自身がどこまで近づくことができたろう、担当を終えた後は至らない自分を感じ、勝手に傷つき家路に着きます。
どうして相談員を続けることができたのか？その一つに仲間との繋がりがあります。様々なイベントにも取り組み、思い出を一杯いただきました。京都いのちの電話が 40 年へ向かう今、もう少し関わって行ければと思っています。
- 「何かがあるから電話してきてはるんです」研修委員からの叱責を今も忘れずにいます。あの時、相談者の怒声の裏にある悲しみや絶望、わずかな生への希望など、どこまで感じとることができていたか、心許ない思いです。以来、私は自分の引き出しを持たぬようにしました。知らず知らずに起きている慣れ、驕り。あの言葉を、いまも自分への戒めにしています。